

## 2. 多文化・異文化に目をむけよう

### 1 多文化・異文化とは

多文化・異文化という言葉を知ると皆さんはどんなことを思い浮かべますか？多文化は多文化共生社会、多民族国家、文化の多様性、国際性といった多様性を受け入れて共存することを連想させるでしょうか。それに対して、異文化というと少し排他的な意味合いを感じる人もいるかもしれません。外国人、外国語、異文化理解、異文化対立といった日本とは距離を置いた異質なものという印象を持つ人もいるかも知れません。しかし皆さんの中には、日本に暮らしていても、自分が親の考え方や相容れないとか、周りと考え方がどうも違うなど、自分自身が他者と違うと意識し、時に疎外感を感じたことがある人もいるかも知れません。また、性別、世代、地域、職業などによっても人びとの持つ背後の文化が異なることに気づくこともあるでしょう。海外に行くと、気候、人びとの風貌、ことば、文化や風景も異なるため、違いを強く意識しますが、異文化は日本にいてもこのように大なり小なり存在するものです。これが異文化を意識している状態で、異文化理解とは、そのような文化の違いを認め、互いに尊重し、相互に理解しようとする態度のことを意味します。このような姿勢は一歩進んで多文化や多様性に目を向けるための土台となるものです。多様性や異なる文化的背景を持つ人々が共生する多文化の中にあっては、違う文化、違う世界観、違う習慣を互いに理解しようとする異文化理解に根差した多様性への対応力が強く求められます。その際、ことばによるコミュニケーション力を培うことはもちろん重要ですが、同時に、異なる文化的背景を持つ人々に論理的に説明する力、説明や対話を持続する力、背後にある文化・価値観・歴史・宗教などへの知識と理解、異文化理解の経験、さらに多様性の中で自分自身の文化や歴史、哲学を知ることによって自分自身の、そして、日本人としてのアイデンティティを培うことも重要になります。

### 2 多文化・異文化とグローバル化

ではなぜ、多文化・異文化に目をむけることが大切なのでしょう。それはグローバル化の波によって、今や地球上の何処に住んでいても、良きにつけ悪きにつけ何らかの形で異文化や多文化に接することが避けら

「文化」(culture)とは？

一定の社会の人々に習得・共有・伝達される行動様式・生活様式の総体。言語・習俗・道徳・宗教・様々な制度などが具体例。文化と似て非なるものが文明(civilization)。文明は、技術的、物質的に一定水準以上に人間が作り出したもので、普遍的・合理的・機能的で数量的に高低優劣の差をつけられるものと考えられている。例えば、電話・自動車の台数や保有率、乳幼児の死亡率など。文明と異なり、文化は数量化や優劣化ができない質的なものである。-高橋・西原(2010)『教養のための言語学』晃学出版。

れない時代となったからと言えます。2011年3月11日に起こった東日本大震災は恐ろしい爪痕を残しましたが、世界がボランティア精神で東北とつながり、情報と人的物的交流が盛んに行われました。また、交通網やテクノロジーの発達も人、もの、文化、情報の流入を加速するばかりではありません。SARSやデング熱やジカ熱など感染症ウィルスもまたグローバル化の波に乗ってやってくるため水際での対策が必要となります。企業も生産性を高め、価格競争に対抗するため海外での経済活動を加速しています。最近世界を揺るがしているアラブの春に端を発した中東の政情不安によるヨーロッパ各地への急激な難民の流入やテロの脅威もまた、今後日本への影響は避けられないことでしょう。これに対して、日本は少子化・高齢社会と低成長の時代を迎え、人口が減り続け国内市場が縮小しつつあります。その中であって、労働人口減少の問題を解決し緩やかな成長につなげていくためにもグローバル化は必然となってきたのです。私たちはこのような激動かつ不透明な時代にまさに生きていると言えます。海外から人が流入し、日本人が外へ出て行き、嫌でも多文化と接触せざるを得ない時代となりつつあるのです。多文化、多様性の中でいかに人とつながり、お互いに違いを理解し、価値観・世界観・歴史観の違いを乗り越えて協力していくことがますます大事になってきていると言えます。

### 3 互いに理解するとはどういうことか

違いを理解し互いに協力することは簡単な事ではありません。皆さんも意見が合わない人やどうにも理解できない人に出会ったことがあるかもしれません。異文化理解においても「カルチャーショック」ということばがあり、意外なことに、食生活や道具など目に見える明らかな文化的な違いにおいては、それほどカルチャーショックは起こらず、むしろ、海外に長く滞在し、人間関係が深まるほど、考え方や習慣、社会の仕組みの違いが鮮明になり、カルチャーショックの度合いが高まると言われています。それを乗り越えるにはことばや文化の理解のみならず、忍耐と想像力、柔軟性こそが重要であると言われていています。このことは、例えば、男性しかいなかった職場に女性が進出してきたり、仕事中心の職場に子育て中の母親が勤務したり、外国人と一緒に働いている状況と似ています。皆さんの多くは小学校から高校まで同じ年齢の人と机を並べて勉強してきた経験があると思いますが、少なくとも社会にいれば、私たちの周りは言わば多文化共生社会だと言っても過言ではないのです。

違いを乗り越えて互いに協力し成長していくためには、忍耐、柔軟性、

SARS (Severe Acute Respiratory Syndrome) 重症急性呼吸器症候群。2003年にアジアで大流行した新型肺炎。

アラブの春  
2010年12月にチュニジアに始まり、2012年にかけてアラブ世界で起きた大規模反政府デモや騒乱のこと。エジプトのムバラク政権やリビアのカダフィ政権の崩壊の契機となったが、イスラム国の台頭などをもたらした。

カルチャーショック (culture shock)  
文化摩擦、文化衝撃。

ことばと文化への理解だけではなく、もう一つ注意する点があります。それは異質に見えるものには必ず理由があるということです。文化は長い歴史をかけて培われてきたもので、話し方、しぐさ、時間の使い方、人との距離感など無意識に行っているものが多く、時に外国の人が見ると奇異に映るものがあります。例えば、私たちはよく相手にお辞儀をしますが、相手に向かって上体を前屈みにして頭を下げるので、自然と相手との距離は互いにお辞儀ができる距離を保つことが多いです。これがそのような習慣のない国の人から見ると少しよそよそしいと感ずることがあります。しかし、私たちがこのように無意識にしていることでも長い間に培った知恵と理由があることに改めて気づくと、翻って異なる国の文化の違いにも必ず理由があるのだと想像することができるのです。異質なものをみてすぐに判断を下すのではなく、「どうしてだろう」「何か理由があるはずだ」と考えることが必要なのです。

よく言われる「アイコンタクト」についても、日本人が相手の目を直に見ない傾向があるのは自己の謙遜（modesty）と相手への敬意（respect）を表しているのに対して、英語母語話者にとっては目を見て話すことは、相手への誠実さ（honesty）を表し、目をそらすことは不誠実さを表しているのととらえられる傾向があります。このように、異文化や多文化の理解しがたい行為やしぐさには背後に何らかの理由があり、長い歴史の中で培われてきたものだという視点を互いに持つことが大切であり、むしろ違いを楽しみ、お互いの違いを認識することで共感に通じ、視野を広げ、互いに協力することが大事なのです。共感まで至らないとしても、理解できれば十分と言えます。

今、日本を含め、世界は激動の中にあり、これまでの価値観を揺るがしかねない問題も生じています。経済では統一政策を進め、文化的には「多様性」を重んじ相互理解を重要課題としてきた EU が今、中東の内戦や政情不安による難民の急増が大きな負担となって、流入を抑制する国々が出始め、EU の文化的理念である寛容の精神が揺らいでいます。また、グローバル化はややもすると世界が西洋近代化へと進む、均質化の方向に向かい、多様性が失われていくことも懸念されています。人類が多様性を失うことは生物学的多様性の観点から言っても危ういことです。多文化・異文化に目を向け、他者に対する偏狭な誤解や思い込みに捕らわれることなく、時に痛みを分かち合い、互いに歩み寄り、新たな関係性を築いていくことが、自らを生かし他を生かす（自利利他円満の）道ではないでしょうか。皆さんはどのように考えますか？そして、国が違えば人は多様で異なることばかりがよく強調されますが、意外なほどに共通性がたくさんあることに気づくことも大切です。

距離や空間のとらえ方。

Hall(1959)の近接学（Proxemics）によれば、人間はだれでも言わば空気の泡のようなものを身にまとって生活しており、その泡は様々な要因で伸び縮みするが、とりわけ他人との関係によって変化し、文化によって自ずと異なる。- Edward T. Hall(1959) *The Silent Language*. Doubleday and Company.（「沈黙のことば」國弘正雄他訳。南雲堂。）

EU（The European Union、欧州連合）  
欧州連合条約により設立されたヨーロッパ 28 カ国からなる 5 億人にのぼる連合体であり、経済・政治においては統一政策を進める一方、文化においては「多様性」を重視し相互理解をめざしてきた。